

Article

歌人とコンピュータ

Kajins (Japanese Poem Writers) and Computers

坂井 修一
Shuichi Sakai

東京大学大学院情報理工学系研究科電子情報学専攻
Department of Information and Communication Engineering, Graduate School of Information Science and Technology,
The University of Tokyo.
sakai@mtl.t.u-tokyo.ac.jp, <http://www.mtl.t.u-tokyo.ac.jp/~sakai/>,
<http://homepage1.nifty.com/s-sakai/tanka/>

1. 手始めに二首

短歌は、五、七、五、七、七の五句三十一音を基本とする定型の詩である。まずは近年出版された歌集の中から、実例を拾ってみよう（図1）。

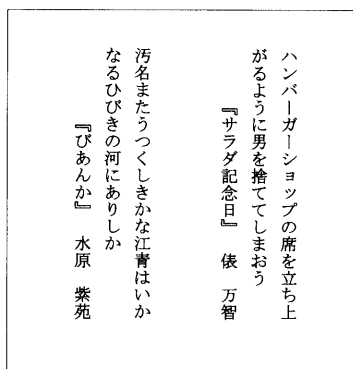


図1 現代短歌の例(1)

俵の一首は、読んで字のとおりで、むずかしいものではない。まず目につく特徴をいえば、第一に現代仮名遣いで書かれており、第二に口語調である。「ハンバーガー/ショップ」、「立ち上がる/ように」の破調はいわゆる〈句またがり〉と呼ばれるもので、意味の切れ目が句の切れ目になっておらず、作品のリズムを大幅に乱している。もしもこれが散文の中に置かれていたら、短歌だと思ってくれる人は少ないだろう。中身も短歌の主題としては庶民的なものだ。

男の人との別れを決意する女性の気持ちはひとことでは言えない苦しいものだろうが、俵はここでは心の葛藤の痕跡を隠し、ぼんといなすような調子で言葉を発している。つまり、感情のもつれではなく、気分の軽やかさで短歌を成り立たせている。こうした庶民性と軽みが彼女の持ち味で、ご存じの

とおり、多くの読者の共感を呼ぶところとなった。

一方、水原の作品は、どこからどう見ても俵のそれとは対照的だろう。歴史的仮名遣いで、文語で（四句の微妙な字余り以外は）しっかりと型を守っている。それほどむずかしい言葉は出てこないが、作者の美学が歌全体に展開されていて、一般にはとっつきにくい作品かもしれない。しかしこの歌、二句切れの古調で美しい雰囲気があり、よくわからないが好みだ、という読者も多いだろう。

江青は毛沢東夫人。文化大革命を指導した四人組の一人で、毛の死後に逮捕され、自殺した。現代中国史にとどろく汚名をもつ女性だが、水原はあえて「うつくしきかな」と彼女を讃える。そのうえに、「いかなるひびきの河にありしか」と言うのである。こう歌うとき、水原は、悪役というしかない江青の人生に、日常とは違う次元で心を寄せ、これに溶け入ろうとしているようだ。逆に、この奇想とも思える心寄せに形を与え、そのことによって自分の内面を表現しようとしたのがこの歌だ、とも言えるわけである。

2. 言葉の作用と作品の理解

私が今やった鑑賞は、現代短歌の読みとしては、どこにでも見られるもので、作家論なり歌論なりはこういふところをもとにして、さらに展開されていく。つまり、こうした鑑賞は、短歌や歌人を理解する入口にすぎないのである。一方、今のコンピュータでこのような鑑賞ができるかと言われると、まず無理なのだろうと思う。

二首の歌を読むときに、口語か文語

か、現代仮名遣いか歴史的仮名遣いか、句またがりや字余りはどこに置かれているか、といったことは、コンピュータでも比較的容易に見いだせるのだろう。句切れのありかや比喩の種類もわかるかもしれない[岩山 96]。一方、より本質的と思われる「軽さ」、「庶民性」、「奇想」、「心寄せ」といったことへの理解は、ふつうコンピュータに期待されていることをはるかに超えているようだ。

二首の歌は、ともに比喩が使われている。俵のほうは、「のように」という直喩表現で「ハンバーガーショップの席を立ち上がる」ことと「男を捨ててしま」うことが結びつけられる。これは、(特に年輩の方々には)なかなか衝撃的なことかもしれないが、比喩のねらいは明らかで、比喩自体の構造も単純である。この感情のニュアンスはまあわかるし、年若い一般読者がそれぞれの気持ちで自分を投影することができる。

他方、水原の歌で使われている比喩は、人(の一生)を川に例えるというよくある比喩(隠喩)である。また、「江青=河」という、字面上的対応(一種の縁語)も見やすいところだろう。

にもかかわらず、水原の歌は、俵の歌よりもはるかに複雑な印象を与える。これは、隠喩一般のもたらす効果でもあるが、より多く、江青という歴史的人物の性格や、「いかなるひびきの」という四句の言葉の斡旋によっているようだ。そう、四句が「いかなる流れの」であったとしても一首は成立する。しかし、読者はこれだとはるかに平板な印象を受けたことだろう。

俵の比喩が読者の気分を外向きに開くのに対し、水原のは、読者を作者の

内面の微妙な部分に向かって誘い込むように働くようだ。こういうことは、作品や作者の本質と直接かかわることだが、それはまた、コンピュータにとって、とても理解しづらいことでもある。

3. 創作と鑑賞の手がかり

短歌の創作と鑑賞はどういう行為(情報処理)か。そこには芸術一般の創作・鑑賞と共通する部分が多く、また小説や詩との類似点をもっと多いわけだが、短歌を理解するのに固有の手がかりももちろんあるはずだ。

まず、一般に詩というものは、日常使う言葉を道具とするため、個々の言葉の「意味」の世界にしばられている。詩は言葉の意味と韻律(音楽)の相乗効果で成り立つ。意味と韻律の関係がちぐはぐな詩は、ゴルフのスイングで腰と腕がばらばらに動くようなもので、どんなに深い感情や思想が込められていても説得力をもたない。

逆に言えば、コンピュータにとって歌の意味を理解することがむずかしく、韻律を感じ取ることが無理であっても、意味と韻律の連携がどうなっているのかを探ることは可能であり、そうすることで詩にアプローチするチャンスはあるかもしれないと思う。

ここで鑑賞に戻ろう。先の俵の歌で、「ハンバーガー/ショップ」,「立ち上がる/ように」の2か所の句またがり、けっして偶然に置かれたものではなく、意図してここに配されたものである。句またがりを二つも使うと、五七五七七の短歌の律とは別の律を作品の中に埋め込むことになり、今様と古典調とが溶け合うような効果を生む。俵の歌を読むときの快いテンポと安心感は、その意味内容にもよるが、こういう律のつくり方によるほうが大きいようだ。

一方、水原の歌の四句「いかなるひびきの」は、一音の字余りである。ここは「いかなひびきの」とすれば型を守ったことになるが、あえて8音を使って間をもたせ、読者の歩みを遅らせ、考えさせる時間をつくるのが大切だったようである。

韻(ひびき)については、例えば水

原の歌で、初句、二句、四句の頭に出てくるア行の音(オ、ウ、イ)の効果を考えてみるとよい。一首を何度かゆっくり読んでみると、純で鋭い響きがここでつくられていることに気づくと思うが、この効果は「江青」の作品を支えるには欠かせないことだ(歌人は、特にア行、カ行、サ行の音の使い方には気を配るもので、これらを使いこなす感覚は、音楽家の絶対音感のようなものではないかと思う)。水原の奇想は、こうした音韻上の効果によって読者の共感を呼ぶのであって、意味内容だけでこの歌がつけられていたら、「汚名またうつくしきかな」は、単なる手前勝手な思いとしか見えないだろう。

というような観察は、多く主観的であり、また結果論的であって、再現性の乏しいものである。しかし、創作・鑑賞の両方に大きな手がかりをもたらしめるものではあろう。句またがりや字余りの導入、音の配置など、創作のときは、理屈で考えるというよりは、試行錯誤の中で選び抜いていくもので、経験からくる勘がここで働く。鑑賞のときも同様かもしれないが、鑑賞時はある程度は法則をつくってアプローチしていくこと(つまり将来の情報科学の対象とすること)が可能かもしれない。

ここで注意しておかななくてはならないことは、生きた文芸の価値の大きなものは、旧来の創作法・鑑賞法の枠を破ることにあるということだ。明治時代に新派和歌が興ったときもそうだったし、現代の口語や英語を歌に導入したときもそうだった。1300年以上の伝統のある短歌といえども、いや、伝統文芸だからこそ、主題・感性・韻律のすべての面でいつも新しさが求められている。ここでもルールは破られるためにあり、たえず新旧の価値のせめぎあいの中で、作品の世界は展開している。だから、今生きて動いている短歌の鑑賞や価値評価を、既存の基準なりルールなりでやってしまうことは、ニュートン力学の頭で相対性理論を評価するようなものであり、意味をなさないわけである。

比喩や韻律が我々に及ぼす効果は、時代を超えて普遍的なものがある。ま

た、人間の生死や恋愛感情には、大和時代から変わらないものがあるのだろう。それが短歌のような伝統文芸が生きる根拠ではある。と同時に、主題も感性も、(世間一般のことと同じで)数年の単位で動いていくものがある。動かないものと動くものの両方を頭に入れて、初めて創作も鑑賞も成り立つのだ。

4. 再び二首

これから現代短歌を代表する歌人たちの歌をさらに二首(図2)観察することで、話を少しだけ深くしてみたい。ともに、歴史的仮名遣いと文語を使って詠まれた歌だ。

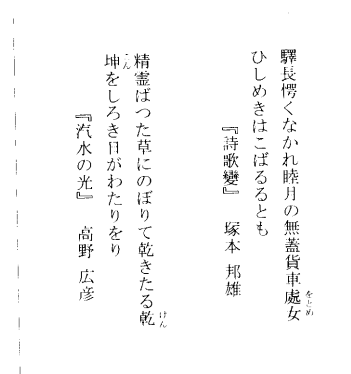


図2 現代短歌の例(2)

塚本邦雄の一首は、倒置法で歌われている。意味だけを口語訳すれば、次のようになるだろうか。

「1月の極寒の中を、少女たちがぎっしりと無蓋貨車に詰められて運ばれてくる。そんなことがあったとしても、駅長よ、決して驚いてはならない。」

一首の中では、「睦月」(1月の古称)が日常にあまりお目にかからない名詞だが、これ以外に特に目立つ言葉といったら「無蓋貨車」があるぐらいで、意味をくむのにそれほどたいへんな歌ではない。ただし、用字は独特で、「驛」,「處女」の旧字のほか、「驚く」ではなく「愕く」を使っている。

ところで、少女たちが無蓋貨車で運ばれてゆく、といったら、読者は何を連想するだろうか。

年輩の方なら学徒動員で工場に運ばれる女学生たちを思い浮かべるかもしれないし、アウシュビッツの捕虜収容

所に送られるユダヤの少女たちや、従軍慰安婦にされるアジアの乙女たちを思う人もあるだろう。難民として故国を追われる人々を思う場合もあろう。あるいは、最近のSF映画を思い出せば、人工知能の支配する社会で奴隷として働かされる女性たちを思い浮かべることもできよう。

いずれにしても、今の日本の日常的な風景ではあり得ない、しかし歴史にはあった、そして近未来にあるかもしれない、相当に戦慄的な場面ではないか。

一首の歌として見れば、先に述べた倒置法以外に、出だしの部分、すなわち「驛長愕くなかれ」に大きなアクセントがあるだろう。句の切り方も一通りではないが、「驛長愕く」と、初句を8音で読み、続いて「愕く/なかれ」と句またがりて読むのが一番ふつうだろうと思う。

重々しく張りつめた出だしであり、リズムも通常の短歌とは違う、重厚で男性的な感じがある。音の響きのうえでは、各句の頭が、「エ」、「オ」、「ム」、「ム」、「オ」、「ハ」となっていて、鋭く澄んだア行の音が先導し、つまるような「ム」の音と、四句までを柔らかく包むような結句の「ハ」の音が追従する形をとっている（三句四句の二つの「ム」は意図的に重ねられている）。さらに、上句では漢語や画数の多い名詞を使い、表記でも緊張感を出しながら、下句をひらがな中心にして優しく収めている。

音韻にもう少しこだわれば、この歌では、それぞれの句の中に出てくるカ行の音（全部で6個）、タ行の音（4個）の効果も大きく、澄んで堅く引き締まった雰囲気をつくりあげるのに役だっている。

これら韻律上の特徴が偶然でできあがったものか意図的にできたものかは、作者にしかわからないことだが、塚本邦雄は、現代の歌壇において極限の技巧を駆使する一人として知られており、すべて意図的と見るのが普通である（詳細は[坂井94]など参照）。

ともあれ「驛長」の一首では、我々が過去にもち、近未来にもつかもし

ない戦慄の出来事（端的には「戦争」）の恐怖が、高い技巧をもって歌われているわけだが、実はこの歌にはもう一つの伏線がある。

図3をご覧ください。これは、歴史書『大鏡』の一節にある菅原道真の有名な漢詩である。読者にもご存じの方はいらっしゃるかと思う。

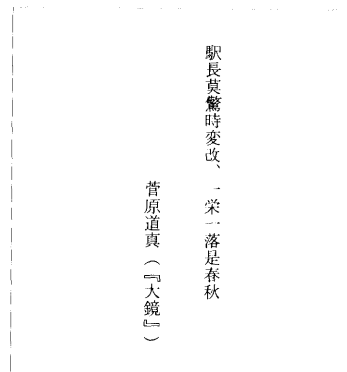


図3 「驛長愕くなかれ」の本歌

藤原氏の陰謀によって太宰府に流されるとき、道真は明石の驛でこの詩を詠んだ。「驛」というのはこの時代、「公用の旅行や通信のために驛馬・驛船・人夫を常備している所」（広辞苑）であった。右大臣道真が太宰に流されるというので驚き嘆く驛の長を前に、栄枯盛衰も時の流れであり運命なのだ、と詠んでみせたのがこの詩である。

塚本邦雄の歌に戻ろう。この歌は、明らかに道真の詩をもとにしてつくられている。菅原道真は、政変によって失脚した自分の身を、東洋的な無常観に沿いながら詠んだわけだが、塚本は近未来の変事を、古典の文脈を援用しつつ、古典とは全く異なった、鋭く現世的で非人間的なものとして歌った。本歌取りは本歌のイメージを奪いつつも、本歌とはまったく別の場所へ読者を拉致し去るのがおもしろいのであって、この歌などは現代における典型的な成功例といえるだろう。

このように、塚本の「驛長愕くなかれ」は、「戦争」の言葉や情景を出さずに、鋭い韻律と本歌取りによって「戦争」の恐怖を歌った作品であった。

さて、塚本の歌を読むときには、読者はどこまでを理解しなければならぬのだろうか。本歌取りに思い至らな

ければ読んだことにならない、という態度はもちろん間違いではないのだが、私は、必ずしもそれは必要ではないと思う。鬼気迫る言葉の力をそのままに味わい、「これはどんな場面だろうか」と想像をめぐらせば、歌を読むことには成功しているわけである。私自身も恥ずかしながら、最初は道真の詩を思うことができなかったが、この歌には強烈な読後感をもった。あとで本歌を思い出して、さらに理解が深まった次第である。

たしかにこの作品の場合、文芸上の予備知識の有無が鑑賞の深さにかかわってはくるが、道真の詩がなかったとしても、これが名歌であることに変わりはなく、読者に強い印象を与える。読者としても、作品を楽しむ際に、教養の有無を過剰に重んじないほうがよいと思う。

それはともかくとして、最近では情報科学的なアプローチで本歌取りを発見することも行われているそうである[山崎98]。塚本のこの例などもコンピュータによって本歌を見いだすのは、そうむずかしくなくなるのかもしれない。長くなったが、次に同じく図2であげた高野公彦の一首に移ろう。この歌でむずかしい言葉は、「乾坤」（天地の意味）ぐらいだろうか。

精霊ばつたが草にのほり、この乾いた世界を白い日がわたっていく。それだけの歌である。

一首に多少の綾があるのは、乾いているのが「精霊ばつた」か「乾坤」か、というところである。「精霊ばつた草にのほりて乾きたる」と三句までを一気に読めば、乾いているのはバッタである。「精霊ばつた草にのほりて/乾きたる乾坤を」と二句で切れば、乾いているのは世界のほうである。歌の読みとしては両様あるだろう。先ほど私は後者のほうで解釈しておいた。詳しくは論じないが、作品としてはそちらのほうがよいと思う。

ともあれ、この一首は難解な歌ではない。バッタ、草、世界、太陽、と出てくる素材も平凡なものばかりである。

先の塚本邦雄の一首と違って、この歌の魅力を絵解きのように解説するの

はむずかしい。韻律上も、初句の字余りや、カ行の音の控えめな効果が目立つ程度で、アクロバティックなところはない。本歌もない。

世界は太古の昔からこういう姿をしていたのであり、たとえ人間が減びたとしても、こういう姿をし続けるだろう。太陽がめぐる下に、小さな名もない命が生きて死ぬ。

こう書いてしまえばあまりに当たり前の感慨だが、こうした世界観を示して今の読者を説得するのは容易なことではない。この歌はそれに成功しているようである。

それにしても、この太陽の冷え冷えとした感じはどうだろう。こういう感触を示すためには、韻律上の工夫や修辭の痕跡を陽に作品に残しては駄目であり、工夫の痕跡をすべて消し去って、言葉が自然に流れただけのように見せることができなければならない。平易そうに見えるが、解説を寄せ付けないで自然そのもののようになっている。こうした歌にこそ、実は文芸の本当の秘密は隠されているように私などは思う。塚本の一首も名歌だが、高野のはまったく種類の違う名歌なのである。

こういうところを理解するコンピュータなり人工知能なりができれば、歌人としては真に脱帽するほかはないだろう。

5. インターネットが短歌にもたらしたもの

少し話題を変えて、近年のIT化が歌人たちに及ぼした影響について若干触れておこうと思う。

その前に、歌壇という社会のありようを簡単に述べておかなければならないだろう。歌壇は、一人ないし少数の優れた作家の主宰する「結社」(昔でいえば「アララギ」など)が集まってつくられている。近年ではよりゆるやかな組織ができてきており、また、複数の結社に所属する歌人がいたりするが、短歌をやる人はどこか1か所の結社に所属して、そこで歌についてののろもろを学び、もう少し大きなところ(商業誌など)に場をもち、歌集・評論集などを出版して活躍していく、という

のが普通であった。結社の主宰者は普通「先生」と呼ばれるが、明治・大正期のような宗匠主義は弱まる傾向にあり、人材不足も手伝って若手は比較的のびのびと活動できるのが近年の傾向であろう。

1996年の春ぐらいから、中堅以下の歌人たちの多くがインターネットを利用した交流活動(歌会や討論会など)を行うようになった。どこの世界でも見られることだが、短歌の世界でも各結社がホームページをもち、超結社的な動きも盛んに出てくるようになっていく。興味のある方は、短歌の世界全体のホームページが[短歌96]にあるので、参照されたい。ほとんどの歌人や結社のページはここからたどることができる。これは、1996年4月につくられたもので、当時は珍しさも手伝って新聞などの取材がたくさんあった。

歌会は普通、物理的に1か所に集まって行かうものであった。人数は、3~4人のものから、200人以上のものまでさまざまである。その実態は、着物を着て(百人一首を読むような)ゆったりとした口振りで歌を読み、ほかの人の歌を古語を使って褒めあう、というようなものではまったくなく、いわゆる文芸批評と同質の厳しい批評・批判の会である。どこの世界でもそうだが、参加者のレベルが上がるほど批評の厳しさは増す。作者の感情がこもった作品が批判されるのだから、学会の研究会などとはまた違った種類の緊張感がある。

メーリングリストや掲示板を使った歌会の場合、従来の歌会と違って相手の顔が見えないので、批評の際に感情の微妙なニュアンスが伝わりにくい。また、短歌に対する姿勢もレベルも異なる人たちがいっせいにものを言うので、話の収集がつけにくく、生産的な議論ができないときもしばしばある。

一方、インターネット上の活動は、多くが超結社で行われるので、宗匠主義が通用しないメリットがある。また、特に地方在住の歌人にとっては、手軽に東京や関西の人々と交流でき、リアルタイムで歌壇の動きが読め、たいそうプラスなようである。いろいろなイ

ベントの案内や広報にも使われ、特に若い人を引きつけるのには大いに役立っているようだ。

そういうメリットがあるにもかかわらず、ベテランの優れた歌人たちの多くは、インターネット上の活動にあまり熱心ではない。その結果、従来の歌壇とネット上の歌壇が分離する傾向が出てきている。

もっとも、インターネット上の歌壇といっても、すでに歌壇に出て活躍中の中堅・若手の歌人たちがネットの場に活動を広げた、というのが今の姿だ。ネット歌壇で生まれ育って本当に文芸としての短歌をつくるような作家は、まだ出ていないか、ようやく出始めたばかりである。これからの展開がどうなるのかは、誰もわかっていない。本物のネット歌人がものになったときには、文体や表記法も含めて、歌の世界全体に大きな変化があるかもしれない。

その兆候はすでにあらわれている。私は昨年、インターネットで応募できるある短歌賞の選考委員をつとめさせていただいたが、ペンネーム一つとっても、以前にはないタイプの人たちが歌をつくるようになったことに驚いた。「あるばか」、「ちんちゃん」、「やや」、「ワルワル」。これが短歌作者のペンネームと知ったら、あの世の輿謝野晶子や北原白秋はどう思うだろうか。

短歌のような文芸は、伝統の厚みを無視しては成り立たないものだ。アナキーさと伝統とを、自分の中で真摯に戦わせることのできる優れたネット歌人が出現することを心から願っている(これも科学・工学の世界とも共通する課題であろうと思う)。

少しずれるかもしれないが、インターネットによって新しく歌の世界に入ってくる人たちは、たいへん短い時間で一首の歌を読んでいるような気がする。短歌はそれ自体短い詩なので、雑誌の記事のように読めば、本当に一瞬で読み捨てることができる。一方で、読み捨てては伝わらない貴重なもの、深い内面的なものはあるのであって、これが捨てられると文芸としての価値が失われてしまう。この時代にあまり悠長なことをいってもしかたがな

いが、私などは、やはり一首をじっくりと楽しみたいし、そういう楽しみを老若男女さまざまな人たちと共有したいと願っている。

歌人は歌集を出版することによって人に知られるところとなるが、これも今後、大きく変わっていくことだろう。俵万智のような例外を除けば、今の歌人は一冊3,000円前後の瀟洒な装丁の歌集を500～1,000部程度づくり、その多くを寄贈しあうことで歌を流通させている。有力歌人が皆インターネットを使うようになれば、電子出版が普通になり、価格も安くなって、流通が良くなるだろう。経済的に余裕のない人や、入門者にも、これは良い効果を及ぼすと期待される。

6. おわりに

今のような忙しい時代に、短歌のような伝統ある文芸を時間をかけて理解し、自分もその伝統に参加しようというのは、難しいことだと私も思う。一方で、人はどんな時代でも生き、愛し、老いて死ぬ。その単純な深さを表現したいと思ったとき、短歌のようなものは、なかなか良いものだとも思われる。この記事によって、現代短歌の魅力の一端に触れていただき、こういう世界

があることを少しでも理解していただければ真に幸いに思う。また、遠くない未来に、短歌の創作と鑑賞のようなところまで人工知能研究者の大きな力が及び、新鮮で大胆な試みがなされるようになると、本当にうれしい。そういう日が来ることを心から願っているし、私自身も、いつか何かの試みをしてみたいと、非力をかえりみずに希望している。

最後に、この文章は、情報学の研究者というよりは短歌実作者の立場から書かれたものであることをお断りしておきたい。人工知能や認知科学の世界では文学・文芸に対して精力的なアプローチがなされていることを存じているが、今回は個々の方々への作物を勉強し、現場の実作の立場からものを言う、というところまで至らなかった。

私自身の専門もあるので安易には言えないが、遅ればせながらそうした世界に参入してみたい希望はいつももっている。

◇ 参 考 文 献 ◇

- [岩山 96] 岩山 真: 自然言語処理: 設計からのアプローチ, 井口, 往住, 岩山 著『文学を科学する』1章, 朝倉書店 (1996)。
[坂井 94] 坂井修一: 現代短歌鑑賞7 塚本

邦雄, 本阿弥書店 (1994)

[坂井 99] 坂井修一: 現代歌人の作歌法, 人工知能学会ことば工学研究会 (第1回) (1999)

[短歌 96] <http://www.asahi-net.or.jp/~mtlm-ootn/tanka-hp/tanka.html> (1996)

[山崎 98] 山崎真由美, 竹田正幸, 福田智子, 南里一郎: 和歌データベースからの類似歌の自動抽出, 情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会, 40-8 (1998)

2001年12月3日 受理

— プロフィール —



坂井 修一 (正会員)

1981年東京大学理学部情報科学科卒業。1986年同大学院工学系研究科情報工学専門課程修了, 工学博士。電子技術総合研究所(現産業技術総合研究所), MIT, RWC, 筑波大学を経て現在, 東京大学教授(大学院情報理工学系研究科電子情報学専攻)。専門はコンピュータシステムとその応用。日本IBM科学賞(1991), 情報処理学会論文賞(1991), 市村学術賞(1995), ICCD Outstanding Paper Award(1995)などを受賞。歌人として, 歌集『ラビュリントスの日々』(第31回現代歌人協会賞), 『群青層』, 『スピリチュアル』, 『ジャックの種子』(第5回寺山修司短歌賞)のほか, 鑑賞本『塚本邦雄』。